

幸田浩子

オペラ歌手(ソプラノ)

中鉢聡

オペラ歌手(テノール)

「生
の
歌
声」
の
感
動

「体」という楽器から紡ぎ出される



1000人を超える観客が入る大ホールの舞台上で、マイクなどを一切使わず、自分の生声だけで歌い演じるオペラ歌手。そんなオペラ歌手には、特別な訓練を受けた、日常とはかけ離れた世界の住人というイメージがある。ソプラノの幸田浩子さんとテノールの中鉢聡さんは、日本のオペラ界を背負って立つ存在。世界的に有名なイタリア・オペラから、現代の日本人作曲家が書いたオペラまで、数々の作品に出演し続けるおふたりは、まさに「特別な世界の住人」といえる。ほっそりとした容姿と笑顔が愛らしい幸田さんは、小学校の音楽の先生をしていたお母さんとコーラスを愛好していたお父さんの元に生まれた。「生まれた時のオギャーという声が高く、周りからこの子は歌手になるかもしれないね、と言われたそうです。その日あった出来事を歌うのが好きな子供時代でした。そのままごく自然に歌手になって今がある、という感じです」いわば一種のサラブレッドである幸田さんに対して、音大に入るまでオペラを観たこともなかったという中鉢さんの少年時代はどうだったのだろうか。

「中学生の時に吹奏楽部に入って音楽にハマり、トロンボーンで東京藝大に行きたいと思いました。でも、受験の講習会に行った時に明らかに僕より上手い奴がいた(笑)。これはムリかも、と思っていたら、ソルフェージュの先生に『君は声がいいから歌に進むといい』と言われてわけもわからず藝大の音楽科に入学してしまったんです(笑)」3歳や4歳の頃からスタートするピアノやヴァイオリンと違って、声楽家はある程度大人の体と声になってからでない訓練を始められない。幸田さんはそれを「歌手は自分の楽器を手に入れられるのが遅い」と表現する。しかも、その楽器は日々コンディションの変化する微妙な楽器で、持ち主のことをいつもきいてくれるとは限らない。さぞや、体調や声のメンテナンスには気を使っているのだろうと思いきや、「気をつけているのはよく寝て、よく食べて、よく笑うことです」と幸田さん。中鉢さんも、「何も気にしないことがいちばん大切」という。オペラ作品は、ギリシャ神話を題材にしたものもあれば、中世ヨーロッパの貴族やお姫様が登場するもの、20世紀の日

本やアジアが舞台になっているものなど、実に多彩だ。オペラ歌手は、そんな様々な時代、様々な物語をもった人物を演じるために、いつもニュートラルな状態であることが必要なのだとおふたりはいう。だからこそ、あまり「これをしてはいけない」「あれはしなければならない」という制約を課すより、自然体を心がける方がよいのだそうだ。ひとつのオペラ公演のために、歌手たちに用意された練習期間はおよそ40日。その間に歌詞を覚えることから始まり、役の性格や音楽内容など、実に様々な要素について考え稽古を重ねる。しかし本番の時は「すべてを忘れて舞台上がれるのがベスト」(中鉢さん)。劇場という空間で、その場の空気やお客様の反応を体全体で感じながら歌い、演じる。オペラの舞台を観ていると、彼らがまるで全身から声を発しているような感覚にとらわれることがある。空気の振動を通して伝わる声のエネルギーが、聴き手の体を包み込むのだ。それは、どれほど技術が発達しても、その場でしか味わえないもの。オペラ歌手が届けているものは、まさに「生の歌声」がもたらす感動なのである。



PROFILE 幸田浩子 東京藝術大学首席卒業。同大学院、オペラ研修所を経て渡欧。数々の国際コンクールで上位入賞後、シュトゥットガルト歌劇場、ローマ歌劇場等欧州の名門歌劇場へデビュー。2000年ウィーン・フォルクスオーパーと専属契約。国内では新国立劇場、二期会の舞台で主役級を演じる他、全国各地でのリサイタル、BSフジ「レシビ・アン」でのMCなど多彩な活動を展開。今後は2月ベトナムにて『竹取物語』かぐや姫、4月7thCDのリリース、7月二期会『魔笛』パミーナなどが予定されている。第14回五島記念文化賞オペラ新人賞、第20回エクソンモービル音楽賞洋楽部門奨励賞受賞。二期会会員。

中鉢聡 東京藝術大学卒業。日本オペラ振興会オペラ歌手育成部第11期在籍中の1990年、秋田県制作の郷土オペラ「ねぶり流し物語」でデビュー。1992年ロッシーニ国際オペラコンクール入選。1993年度文化庁芸術家国内研修員。1995年「椿姫」のガストン役に藤原歌劇団のデビューを飾る。1996年イタリア留学。帰国後はオペラに加えオーケストラとの共演でソリストとしても活躍する他、サッカー親善試合で国歌を歌うなど注目を集める。新国立劇場には開場記念公演より数多く出演し、3月28、29日には「袈裟と盛遣」に出演。藤原歌劇団団員。



2014年 オペラ『春琴抄』